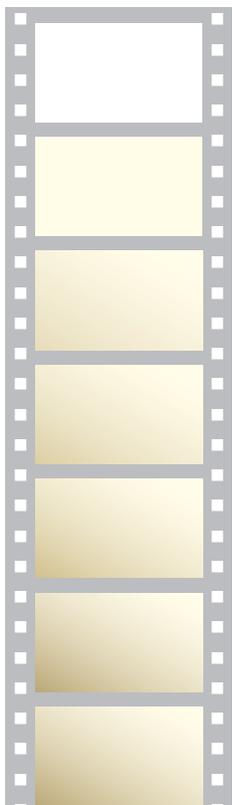


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第四十二回 「DJって何？」 ②

「ディスクジョッキー」（以下DJ）。この言葉は、30年代からアメリカの放送局で使われはじめ、一般に定着したのは第二次大戦後です。ごく限られた人員と経費で、レコードがあれば制作できるプログラムとして誕生したのがDJ番組です。

日本では、故糸居五郎の「オールナイトジョッキー」（59年〜67年）は別格として、本格的な深夜の生放送がスタートしたのは67年、TBSの「バックインミュージック」（昭和42年7月31日〜57年7月31日で終了）が最初でした。また、同じ年の10月1日からニッポン放送の「オールナイトニッポン」が始まりました。

柱 「オールナイトニッポン」

♪ テーマ曲 ビタースイートサンバ

作曲 ソル・レイク

演奏 ハーブアルパートとティファアナブラス

ナレーション

Q 君が踊り、僕が歌うとき、

新しい時代の夜が生まれる。

太陽のかわりに音楽を、

青空のかわりに夢を、

フレッシユな夜をリードする

オールナイトニッポン

このすてきなイントロのナレーションは、若者の夢と希望を象徴するかのよう
に力強い勇気をほくらに与えてくれました。

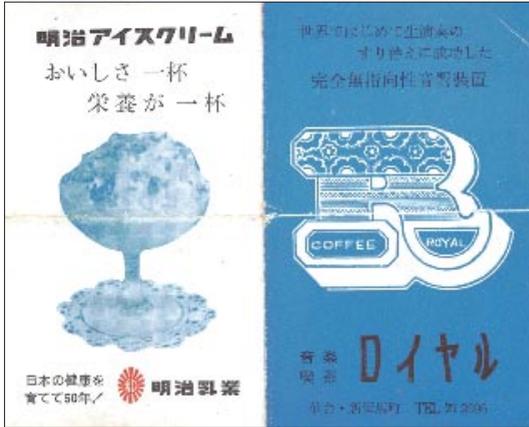
深夜、午前1時から午前5時まで、一人のパーソナリティー（DJの担当者）が
日替りで週に6人、リスナーから投稿される手紙やはがきを読んで相談に応じたり、
リクエスト曲をかけたたり、どちらかという音楽中心で企画された若者向けの番組
でした。

その証拠として、後にニッポン放送の社長になったパーソナリティーでありディ
レクターの亀渕昭信とアナウンサーの斎藤安弘が「カメ&アンコー」というグルー

プ名でレコーディングした「水虫の唄」は20万枚をセールスする大ヒットとなり、ラジオ局の人間がテレビ局の歌番組に出演するという逆転現象まで起こしたのです。そして、ラジオの深夜放送はルネサンス（文芸復興）を迎えたのです。

東京のブームにあやかっつて、仙台で初めてオープンしたDJ喫茶は、仙台駅に近い中央通りにあるパチンコ店の2階にありました。名前は「音楽喫茶R」階段を上がると客席がふたつに別れ、右側の方が左側よりも広いスペースになつていて、天井を見ると地球の形をしたスピーカーが、数台ミラーボールのように天井からぶら下がっていました。DJのスタジオは、階段を上がり切った右側にレジ（会計）があり、そのレジに隣接して、アナウンスブースを兼ねたスタジオがありました。右と左にLP用のターンテーブル、足元にはオープンテーブルの音を送り出すデッキ、そして、一番大事なマイクが2本（自由自在の方向へ向きを変えることが出来るフレキシブルマイク）そして棚にはレコード会社から売り込み用のテスト盤やシングル盤、棚に入らないLPレコードは、床に立てかけて置いていました。

スタジオには、女性が3人入つて研修をしていましたが、アナウンスして、レコー



▲音楽喫茶 ロイヤル（仙台市新伝馬町）

ドをセットして、次の曲はセットしたので、その次の次の曲をスタンバイする。その間に曲の間に話すことを考える。このパターンを一人で1時間くり返すのですから、事前の準備がいかに大切か、わかって頂けると思います。

（続）

（文中敬称略）

伸

平成24年5月